

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日刊
昭和十二年四月一日發行
第十四卷第四號
一月一日發行



NO.IV VOL.XIV

！うか行

へ路勢伊.和大の春

伊勢神苑
宮川堤
湯の山温泉
養老公園
吉野山
奈良公園
多武峯
赤目四千八百瀧
志摩めぐり
あやめ池



車電急参軌大



川柳
✦
雜誌

第十四卷 第四號

不朽洞句稿

麻 生 路 郎

拾ひ屋のすがたも霞む窓にゐる
闘病のそこにも春はさんらんと
春の日はねまきのままで暮れてゆく
夫婦あらそへり旅をしながらも
同情の最後の品に米俵
清明君のお嬢さんへ
背の君へうれしくたたむものばかり



川柳雑誌 四月號目次

文苑

題字・路郎筆

川柳名句評釋……………麻生路郎(四)

武玉川三編研究(四)……………梅本秋の屋
森東魚(三)
蛭子省二

自宅にて(よしの夫人へ)……………安川久流美(三六)

花咲爺さんのこと……………石曾根民郎(三五)

書・齋・よ・り……………麻生路郎(三三)

柳川名古屋の姿……………吉田水車(三〇)

漫書セク
シヨ
ン
櫻狩異變
オサカ・マンガ・トリオ……………小川幹武(三四)
桶口ヒロム

川柳指導講座……………塚越正光(二七)

行路集(短歌)……………長野晴濱(三七)



春宵閑語……………小林茗八(三)

川・協・の・頁……………(三)

川・柳・書・架(六四)……………(三六)

創作

川柳塔……………麻生路郎選(二六)

近作柳樽……………麻生路郎選(六)

不朽洞句稿……………麻生路郎(一)

日本名所名物川柳(京都の巻)……………山川紫明選(三)

一路集落花……………朝賀大鱗畫(三)

惡戯……………池田可宵選(三九)

各地柳壇……………(四〇)

柳界展望……………社關係の人々……………(五一)

柳誌要目……………川・雜・案・内……………(五)

編輯縦横……………(五〇)



川柳名句評釋

(9)

麻生路郎

うりぐひの素直に物をくれてやり

雀郎

一つく影を消してゆく、うりぐひは寂しいが、おそかれ早かれ無くなる品だ。欲しいものは呉れてやるさ。この世にさへ執着を持たぬ身が、何んの物になぞ執着があらうぞ。

肺だからよるなと言へば涙ぐみ

晃卓

「あまり近くへ寄るな、うつるから」と云へば「傳染つてもいゝわよ」と早や涙ぐんでかゝる。愛と愛の火華。

買つてやる風にも親の好き嫌ひ

周魚

あに風のみならんやである。

高商へ行くと親は云ふ。文科へはやれぬと親は云ふ。あの嫁貰へと親は云ふ。あゝ親は云ふ、親は云ふ。氣の弱い子の前途は暗い。

君雲を話す心になり給へ

鮎美

人間と生れたら、濁流に飛び込んだも同然だ。よく泳ぎ切るもの幾人かあると云ひたい。右しても左しても、醜惡の壁に突きあたるばかりだ。

幸福のお膳は缺けてゐてもよし

琴人

缺けてゐやうと、剝けてゐやうと、差し向ひのお膳に盛りあがつた幸福こそは千金に換へ難い。ねえ、あなた、なんだい。それで萬事はOKだ。

玄關に位負けせぬやうに立ち

福造

堂々たる玄關に位負けすまいと、ふんぞり返つたところが既に／＼位負けしてゐるのである。それを氣づかないところに人間味がある。面白い。

雑巾の雫をひいて國のここ

黄子朗

青雲の志——それは本の中にあつた字だ。金が何んだ。成功が何んだ。平和は反つて故郷にある。あゝ雑巾の雫よ、儂は一體どうしたらいいのか。

妓一せいに鮎の骨をぬき

水府

虫も殺さぬやうな美しい妓達が、一せいに鮎の骨を抜いた異風景。美醜の對照、馴れつこのおそろしさ、それを觀取した作者の慧眼がこの句のいのちであらう。

三味線もせうことなしの鳩ぼつぼ

大門

さりとは野暮なお客様とも云へず、鳩ぼつぼを弾く。あゝ三味線が泣く、腕が泣く。

へつらつておもねつてまだ平社員

迷亭

すまじきものは宮仕へか。靴の紐を結ぶ位は愚かなこと二號邸への御注進係りまでつとめて、やつと首がつながつてゐるとは、社員たるまた難いかなである。

よしんば胡麻にしてもお百姓様様

半文錢

吹けばパツと散る胡麻、その一粒だに——汗、汗、汗のたまものだ。尊きは汗の力か。

民事部に慾をはなれた顔もなし

狂水

結婚解消もいゝが、すぐに慰籍料請求と来る。家賃も拂はずに立退料がどうの斯うのと、こゝもと浮世ぢやなアの感が深い。

足袋を履く時にみだらな廿四五

松窓

女の二十四五、既に男を知つた艶姿こそは、魅力一〇〇パーセントの風景。男なら——心を動かさずにはゐないだらう。



近作柳権

麻生路郎選



グレシヤムの 法則だよと 餓が云ふ
大 阪 柳 大 門

一子病みて三句

會社には まだ強いのがゐると 酔ひ

熱の無理そら父ちゃんもこゝにゐる
京 都 桑 原 京 郎

徴兵検査の 歸國 日本海が見え

子の病室 父が 繪解きに 坐らされ

婆は 婆で 角座の 連れをもつてゐる

芽ぐむ春子は 子で 伸びてゐるのなり

横降り の 雨が とび 込む 耳の 穴

世渡りや 白髪 染めての 御出勤

昨晚のお 續き 谷で 死んで 居す

墓石へ 人間 悪を 遺しとき

賣立の 蕪村 隣りに 其角も 居

昭和十二年千支に一句



丁丑僕もこゝらでUターン	同	肩叩器孝行らしくない音よ	同
こてあてた妻へ若さを認めてる	大阪 畑田よし江	遠くからお辭儀し合うて辻を折れ	同
新參へ又叱りたい顔が寄り	同	お便へ値切らす法も言ひ添へる	同
蔭口は今その口で賞めて來て	同	算盤を振つてルムバの足拍子	大阪 秋山 古心
面會は代役で濟む人になり	同	苦學して出て平凡な會社員	同
オライガ早くてバスにこけて乗り	同	要點へそれから觸れる煙草つけ	同
妻とゐて今日の話も又たのし	長野縣 金井有爲郎	子澤山障子破れたまゝの冬	同
豚はただふとれくと念じられ	同	銀狐土工の鼻があざわらひ	兵衛縣 酒井美知夫
生活の重みを支へたる枕	同	リスの様に小僧の自轉車がぬける	同
妹の死二句	同	お悔みに行く鏡臺も手間を取り	同
固くなつてゆくこれが十九の女の死	同	肩書の裏は慘めなモルモット	同
とりかこむ人々うつる藥瓶	同	財閥の衿元寒い二月の日	京都 田中 烏雀
歿落へ島田が似合ふ娘が一人	神戸 岡田 某人	借らぬ氣の家も納屋までのぞいとく	同
叱られた夜を丁稚のかがんで寝	同	湯屋の溝祿女のにほひを思はする	同
タクシーのいたく更けたる飛ばし様	同	營門の樓へ歸る兵は酔ひ	同
謹嚴實直小錢の數をおぼえてる	同	偽らぬ戀を吸取紙に吸はせ	山口縣 三原 狂路
冬の耳伊達の眼鏡やマスクやら	ヶ治 石手 河鹿	吊皮へ頼りきるのも女にて	同



通勤の女給を待つたダツトサン	同	不意打ちに袂引かれた水たまり	大阪	富本 無煙
街角のバット素早く賣切れる	同	類焼へ保険の事を先づ聞かれ	同	同
どうかなるだらう日向で子と遊ぶ	廣島	鐵骨の軽い命を見上げられ	同	同
號令をかけて子の手をひいてやり	同	直情のなんにも云はず立上り	八幡	上野十七八
齒がいたむ子を寝かす智慧出しつくし	同	寒行へさつきの錢を子に借りる	同	同
腦溢血妾まことに慌てたり	登中	貰ふ身になつて見立て、鬘斗を貼り	同	同
枕もと涙をこぼすなと云ふに	同	令夫人女中に話す愚痴があり	大阪	馬淵 龍城
葬儀屋のシルクハットが風にまひ	同	ひやかした店で手袋忘れたり	同	同
仰向いて故郷を出た寢臺車	廣島	都會人エスカレータを駆け上り	同	同
山の驛四五人眠らせて通過	同	金ばかり要る戀なりき冬の雨	兵庫縣	林 朔風
ラデオ今擬音の汽車を出すところ	同	美しい男をねたみ街を行く	同	同
書を友として變人となり終り	今治	肩上げの戀がぬれたる夜の霧	同	同
幸運に非ず努力の立志傳	同	宵星へ兒等の唱歌がよくそろひ	大阪	松枝 靜波
裝飾になるとは悲し苦心の著	同	なる程と言つた弱みを儲けられ	同	同
下駄ほして女ばかりの生活なり	熊本縣	まけときなはれとをんな厚釜し	同	同
キリストのことで看護婦長ともめ	同	大阪の氣ぜはしなさに逃げかへり	朝鮮	村野東狂子
キング富士寢付の悪るい枕元	同	都會から仕入れた智慧で煙に巻き	同	同



- 悪戯と判り説論でかへされる 同
 男湯に女の線の女の子 大阪 山川 一生
 春麗ら嫁ぐ娘へ伯父もからかつて 同
 犬の鼻石につまづきそうに行き 同
 配達の素通りをして雨しと 松山 芝田 薫子
 春四月繪葉書で来る旅だより 同
 一機二機つゞいて三機日本晴 同
 ビル街へ来てチンドン屋よく響き 大阪 八田 鐘生
 信心の足らぬを故郷から叱り 同
 宣傳のいと賑やかに店什舞 同
 チョツピリと春をにほはす柳の芽 朝野 高原愚源太
 客の靴はいて坊やは意張つてゐ 同
 形式のない友からの祝物 大阪 大阪 形水
 居なくなれば取得のあつた男なり 同
 人波はみんな儲ける氣の競馬 京都 福田 丁路
 七年目に男子誕生 同
 産聲に續く知らせは男の子 同
- 働いた足袋がストープ取巻いて 大阪 庄司淡路坊
 善良な市民荷車押してやり 同
 新世帯フランス人形よく目立ち 大阪 高畑案山子
 名を呼べば窓のカーテン動いてる 同
 頭から蒲團被つて故郷の事 朝野 廣津 慶一
 同縣と知つて巡査は笑つたり 同
 この女にも戀があるのか目をみつめ 山口福 西口悲戀坊
 入營の友の握手をにぎりしめ 同
 始末書を出して書類が手につかず 朝野 豊島石燈籠
 つるし柿何時とはなしにへたがふえ 同
 これから二通話を咳の中で聞き 今治 月原 啓明
 春風へ又轉宅がしたくなり 同
 鼻眼鏡から酔が見え始め 松江 勝谷山川兒
 陳情は廊下の幅になつて出る 同
 くだびれて歸れば我家けむらせて 大阪 小鹽 静路
 丸善の包装インテリぶる女性 同
 舊友を訪へばベッドの四年越し 大阪 石田 沐天



伯父様よなんてムツキが剝けかゝり	同	カルモチン死んで花實が咲きました	高松
きぬくの炬燵の上の觀世撫	松江 田中都之介	はりだしにそむかず猛犬吠えたる	同
地藏さんの脊が伸びそうな春日和	同	善後策揃はぬ顔へ更けてゐる	長野縣 高峰 柳兒
紙芝居遂に本當の咳になり	丸龜 馬場 浪二	慇懃にマスクをはづしてゐる弱身	同
旅役者俺にも出来る桐一葉	同	押し賣りへ頭を下げてムツとする	大阪 鳥居 柳笑
門衛が板に付いてゝ動四等	大阪府 米本貴志子	持てあます子へ飛行機が来てくれる	同
痛いところだらけ五十のスキーヤー	同	冗談にされてる人氣者の戀	今治 谷 心府
大自然神の姿と思はるゝ	大阪 川村 親月	子等が皆すんで母親箸を取り	同
電燈がついていよゝ立ちあがり	同	もう我慢出来ぬ姿でさしをふり	大阪府 黒川 紫香
欠席の風邪嘘でない咳をする	愛媛縣 今川 椋影	特急をしばし欠伸で見送りぬ	同
嘘だなと思ふ電話へ嘘をつき	同	なつかしい故郷の屋號で呼ばれたり	尾崎 酒井 斗風
泥水を撥ねて自動車五十キロ	朝野 桂 閑々坊	沈黙の強さを友の背にみる	同
ほろにがい萬金丹へ旅の宿	同	パーマネントウエーブ雪がのつて溶け	大阪 正本 水客
妻と居れば子供の事と金の事	愛媛縣 由利 孝輔	啞の子にサク／＼砂は音たてる	同
君と呼ばれて軽い反感	同	咳一つして表情をとゝのへる	熊本 佐々木孝子
朝風呂の父デレットに親しすぎ	名古屋 星野 兄兄	言譯の隙もあたへずベルを押し	同
伸びるだけ伸ばして切れたゴムバンド	同	親切を笑つてサービスですと云ふ	大阪 山本 葉光

菊五郎 汐波

汐波の桶のアルミも時代なり

同

彈丸不發打ちよい方へ鳥は逃げ

長野

佐二本千隈

贅澤な猫を鼠は知つてゐる

大阪

米林 舞蝶

恐ろしい長背なり不孝者

松江

村田 牛歩

働く身誇りたげなるバスガール

大阪

岩橋 岩石

戯れのいつしか軽い戀となり

阪島

鳥生 枯佛

春の陽のよつほど伸びた大工小屋

静岡

長島 柳坊

なにを燻べたか女の部屋に煙ある

神戸

山田 貧兒

恐るゝ父の膝へ笑ひ寄り

朝霧

弘津骨人坊

ポケットに櫛と鏡のある若さ

島根

勝部 海棠

襟立てゝ折提げてるは酔ふてゐず

全治

石手向上庵

團體があつて母親旅を知り

松本

名越 新華

友情のあゝそれなのに線を越え

長野

原 獨仙

看護婦の丸さに笑ふ快復期

大阪

金井 串郎

今日からはインキが違ふ日記帳

長野

林 幹

訣別の握手へ彼女涙ぐみ

大阪

今井 菊路

がちやりつと置いた受話器へ腹を立てて

全治

石田美須賀

ピフテキをフォーク右手に國訛

大阪

阿萬 萬的

寝不足のズボンに散つた齒磨粉

尾崎

山田南濃路

死を以て最後とするは皮相なり

高松

楊 柳夢

一すじの煙風なき黄昏や

島根

寺本 嵐峰

笑ひこらへて押賣の聲を聞く

大阪

加藤ライト

行きずれの移り香となり春を知る

松下

神谷 正司

生きのびた金魚へ春の目を當てる

東京

村野蒼梧樓

結納と別に仕度のかづくや

奈良

嶋田 翠峯

親切が身につく程の旦那にて

尾崎

屋代 青子

火の始末妻は産氣の中で云ひ

長野

中村 猪郎

グループの一人が酔ふてから酔へず

大阪

北川 春集

寄席はてゝ安全地帯風いたし

尾崎

坂井 正胤

お辭儀する孫の姿も眼鏡越し

島根

松 竹梅

兄であり戸主でもあつて馬鹿にされ

神戸

藤野 靜水

醫師みんな博士になつてしまひさう

大阪

畑田 炭車

不平組不平のための酒をくむ

岡山

門田 雨城



御詠歌は養子にひけ目感じさせ 大阪 阪本遠見路

内緒のはなしに女裾を焼き 兵庫縣 田邊 由布

たとへ餓死すともと父の潔癖性 兵庫縣 山本 勇坊

徳利持つ兒へ番傘は大き過ぎ 石川縣 松本 文太

獨身と云ふのが萬事解決し 朝野 齋藤不夜城

自動式乗るが早いか閉り居り 大阪府 大島 錦溪

無口者云はずに通す術を持ち 神戸 藤井 徒歩

涎掛前齒二本が笑いかけ 石川縣 山崎帆加夫

X

大門君のでは「婆は婆で」「昨晚の」に面白味を

感じ、よし江君の「新参へ」「蔭口は」では漸く社

會の裏を覗いて來たらしい有様が出てゐる。古心君

の「算盤を」は若さが躍つてゐる。烏雀君の「借ら

ぬ氣の」は機微を掴み、「湯屋の溝」は柔い情感を

そそる。閑生君の「腦溢血」は痛烈骨を刺す鋭さ

である。宗正君のでは「下駄はして」が靜かな生活を

想はせていゝ。本號の句は總體に前號よりいゝ。季

節による刺戟の強弱といふことも想はされる。(路)

句會 (六日)

日時 四月六日 午後六時半

會場 誓得寺 (清水町電停北一丁西二入ル右側)

兼題 「麥酒」 三句 麻生路郎師選

「割前」 三句 橋本綠雨選

講演 演題未定 森 東 魚氏

會費 三〇錢 (但川・協會員章提示の方は二〇錢)

幹事 綠雨、里十九、豆秋、夕鐘、八歩

吟行 (二十五日)

日時 四月廿五日 (日) 午前十時アベノ橋大鐵

驛前へ集合「晴雨不論」

兼題 「折詰」 五句 麻生路郎師選

「田舎道」 同 朝田新水選

行程 道明寺——玉手山遊園地——汐ノ宮

(汐ノ宮温泉にて小酌)

會費 約二圓五十錢

(電車賃、晝食、小酌共)

注意 雨天の場合は「汐ノ宮へ」直行

幹事 艸樂、里十九、おさむ、新水、豆秋



武玉川三編研究 (四)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

(52) 剃刀に羽子の程の息を懸ケ

東 魚「羽子のこ」であらう。羽子も息をふきかけてつく。剃刀も息をかけて、掌で數回擦つて、剃りにかかるそれを對照した、けである。

秋の屋「興味索然」。

省 二「子供がナイフに、息をかけたりにして居るのをよく見る。」

(53) されはこそ様子有へき普門品

省 二「さればこそ」は前句の響をうけて居るであらう。『法華經第二十五品、觀世音菩薩普門品は験驗あらたかなり。御祈禱の折りなどに讀誦するから『鳴りやんで折目をたむ普門品』でもある。普門品を讀んで居るのが、

「様子有へき」であらう。

東 魚「何か犯しがたい様な人柄と思つたのに、普門品を讀誦してゐる。さればこそ、なのであらう。」

秋の屋「謡曲の『盛久』を詠んだもので、前句の響を承けずとも、能く聞える句である。」

東 魚「盛久」なら初めから身分は判つてゐるから、今更「さればこそ」でもなからうと思はれる。

(54) 樽拾ひあやうい戀の邪魔をする

省 二「あれも人の子樽拾ひと、同情は得て居るが『樽拾しもの乳母を言ひまかし』すれツからしもある。とまれ、果敢ない戀を楽しむ、邪魔をする役目を買つた樽拾ひは損な立場だ。『末摘花』二に『や○かしてゐるよと觸れる樽拾』」

東 魚 朝早い、まだ人々あまり起き出ぬやうな時は
はかない戀の邪魔をするのは、樽拾ひも罪な事である（柳
樽初篇同句あり）

秋の屋 樽拾ひの戀の邪魔、陳腐な材料である。

(55) 約束の紀念も後家のもみかへし

東 魚 己が死んだら、これを記念にやらう、などと前
以て話のあつた品を、さて、當の本人が死んだとなると、
惜しがつて後家さんが變替へて、その品をくれぬのであら
う。

秋の屋 前説の如くであるが、「揉みかへし」は能く言
ひ得てゐる。

省 二 「もみかへし」は紅返しの下着などいふ、それか
と解してゐた。

(56) 遠くから娘の迷る 焚火陰

東 魚 焚火をやつてゐるのが見えるので、何か恐ろし
い連中かも知れず、村の青年達にした處が、からかはれる
位は覺悟せねばならないから、遠くから逃げて行くのも、
流石に娘らしい處である。

秋の屋 街道筋の雲助の焚火には、有髯の男子も躊躇す
る。まして妙齡の女では。

省 二 若い女をみれば、口笛をふいたり、聲をかけた
り、兎角からかひたがる若者の焚火。

(57) 引舟に連立て 行鳥打

秋の屋 川沿の田畑などを荒す鴉をうつ爲に、數人引舟
に乗つて行くので、實景らしい句である。

東 魚 狭い野川と思はれる。岸を引綱を曳いて行く人
と、鳥打が一所に連立つて、岸を歩いてゐるのだと思ふ。
舟へ數人の鳥打が乗つてゆくのは變だ。

省 二 「連立」だから、俱に歩きながら、話合つて行く
のである。

秋の屋 「連立」とあるから、數人と考へたのである。

(58) 馴染か付とかはる 取親

省 二 段々、根引される話なども出るであらう。取親
ば假親で、その顔により世間態をとりつくらふためである
秋の屋 素性が下賤の女であるから、身請けされる場合
には、取親が最必要であるのだ。

東 魚 取り親は、養ひ親と辭書にある。茲は蛭子氏お
説の通り、假親の意である。

(59) 眼の下の物を見くひる 崖作り

秋の屋 他をみくびる資格のない勞働者が、偶々高い所
へ上つたので、よい氣になつて瞰下するのである。

東 魚 「崖作り」は崖へ乗り出して建てられた建物の意
であらう。（崖作りの觀音などと云ふ）

省二「崖造り」は懸造りにする事であつて、建築物となる謂にのみ、どの辭典にも載せられてある。即ち勞働者の方には、第二義としてさへ見當ぬ。然し秋翁説の如く解してみたい心地にもなる。「崖作り氣に入る家が二三つ」(金砂子)

秋の屋 前既は取消し。如何にも崖作の高い家から、その下の酒屋を蔑視するのであらう。

(60) 飛鳥の先にたゝんと木葉ちる

省二 鳥は飛ばんとして居る。木の葉はバラ／＼とちる。(中七の「先きたゝん」には、もつと深い意味を持つて居るが、此場合軽く解してもよからう)中七に技巧ある作秋の屋 技巧を弄して興味で無い。

東 魚 一陣の風がきて、多くの木の葉が空へバラ／＼と舞ひ散る趣きは、恰も小鳥が樹から、一度に群れ立つさまと似てゐる。其飛鳥の光景にも劣らじと、木の葉が散る事である。と云ふのであらう。

(61) 取あけ婆々きもとす引汐

秋の屋 妊婦の陣痛が發つたので、助産婦を招いたけれど、子の産れるといふ満潮時を過ぎて、分娩する氣色がなく、頓て退潮時にもなつた故、一先づ助産婦を歸宅させるのである。

東 魚 助産の時などには、得てある事である。

省二「婆あさんは潮待をして舟をこぎ(古狂句)で、遂に引汐になつてしまった。

(62) 兩袖に秋風つゝむ寺小姓

省二 秋の寺は殊に閑寂なものだ。寺小姓の兩袖にも秋風は吹いて、一層情趣を深ふするものがある。(寺小姓とは僧侶に召使はるゝ稚兒小姓)

秋の屋 師僧の心にも秋風が立ちはせぬ歎。

東 魚 「秋風つゝむ」とはどういふ意か。秋風を隠す。つまり、淋しい秋の氣分をかくして、艶めいた兩袖の姿に寺に一つの華かさを、色彩を點じてゐるのであらう。

(63) 小荷駄の首の正直に行

秋の屋 重量の小荷駄を乗せてゐては、脇見をする事も出来ぬ故、眞直に道を行くことであらう。

東 魚 重い荷には、流石に首を垂れがちにしたりするさまを云つたのであらう。

省二 小荷駄馬がトボ／＼行くさま。

(64) 見送て行蟬の小便

省二 人の来る氣配がすると、鳴止めて小便をして飛去る。見送つて行くより致方もない。

秋の屋 意餘つて語足らぬ句で、蟬が見送るの歎、人が見送るの歎、その判断が出来ぬ。

東 魚 〓 句法に前説の如き缺點はある。「見送る人に」とか、「見送るまゝに」とかすればよいであらう。

(65) 御幸の牛の物喰ひもよし

秋の屋 〓 行幸の御車を曳くのであるから、荷車を曳く駄牛のやうに、腹一杯に餌を食はぬであらう。

東 魚 〓 流石に訓練されてゐて行儀がよい。矢鱈に道の草なんか喰はないのであらう。

省 二 〓 物喰ひがよいから不始末もせぬ。――肩斧日録七編に「あるまじき物を京にも牛の糞」とあるが、腹一杯くはぬ御幸の牛は、その不始末はせぬ。

(66) いく度たまして疊むちりめん

省 二 〓 「だまして」は巧妙。ちりめんは疊んでゐて張合ひがあり、又心地もよいものだ。

秋の屋 〓 巧妙といへば巧妙であるが、私は斯ういふ句を好まぬ。

東 魚 〓 「だまして」といふのは「色々に扱ひ盡して」の心持ちか。どうも充分解しかねる。

(67) 田澁汲たらいは妻のきぬさゝき

秋の屋 〓 「さゝき」でも「さらさ」でも難解の句。

東 魚 〓 何とも解らぬ。「さゝき」の間違ひでもあらうか。

省 二 〓 田澁は田の水さびであるが、下の方がわからぬ「春の田に鐵漿ほどの澁浮て」(武十八) 其他を集めては居るが。

(68) 巻紙の二重心は跡へまき

省 二 〓 「二重心」なる語を用いた句は、二編に「膏藥の二重心は穴を明け」があつた。原句は終りから巻いてくる手紙を、始めの方から巻いてゆくのではないか。

秋の屋 〓 巻紙を糊で繼いで巻く時に、最初の一枚の末端を、二つに折重ねるのを斯く詠んだもの歟。之れも正解を下し難い句だ。

東 魚 〓 返す書きを書く爲、跡へ巻いたのではあるまいか。返す書きは、本文の書初めから、各行の間へ割込んで一段下げて書くのだから、又初めへ立戻る要があるわけである。

(69) 猿の戻りのみゆる高橋

秋の屋 〓 谷川の絶崖に架けてある橋の上を、山へ行つた猿の立戻る姿がみゆるといふので、人里を離れた山間の風景である。

東 魚 〓 谷から峯へでも猿が戻るのを、橋から人が見たのではないか。

省 二 〓 溪谷へ高くかけられた橋から、猿がみえる。秋の屋 〓 これも兩君の説に隨ふ。



容易い課題は難かしい

川柳指導講座「煙草」

塚越正光

こんどの課題は「煙草」である。煙草の味を知らないものはあらうが、煙草がどんなものか知らないものはない筈である。とすればこんな作り易い課題はないのだが、誰でも知つてゐる課題であるだけに、却つて難かしいとも言へる。といふのは胡魔化しが利かないからである。これはひとり私達の川柳ばかりではない。世の中のすべてがそれedyさしいものほど難かしいのが常である。

諸君の集句を見ると課題がやさし過ぎて焦点を合せにくかつたのではあるまいかと思ふ節がないでもないが、又一方には課題にこだわり過ぎて手も足も出なかつたやうにも思はれる。斯ういふ課題のこなし方として句會の先輩達は煙草そのものへ焦点を合せずに、煙草を吸ふ人物とか、煙草のある周囲とか、其他煙草を背景にして課題を浮き上ら

せる手法を選んで作句するのが常である。

諸君の句を検討する前に、私達の先輩の句を見ることも無駄ではないと思ふので、柳樽二篇を披いてみよう。古川柳で思ひ出したのはと云ふよりも、私が暗誦してゐる句には

禿來て鼻から煙を出せといふ
がある。茲まで煙草をこなしきつてゐるのはちよつと見當らない。二篇からは

すひつけて煙をいたゞく野がけ道
ふき敷を禿をよんで たづねさせ

の二句しか發見出来なかつた。然しこれでは現代の川柳作家の例句には餘りに縁の遠いものと云はなければなるまい手近の川柳雜誌三月號を見やう。こゝには

紫煙ゆるやかに水晶の首判 久流美

なんだ萩かと女將のたばこみなが喫ひ 雅 幽

窓口へ呼ばれる妓の巻煙草 鮎 美

増税をからく笑ふ喫煙所 遠見路

の四句があるが、これは勿論「煙草」の課題として詠んだものではなく、それ／＼雑詠又は他の課題で詠んでゐるのだが、「煙草」の句の作例としてあげることが出来る。

最近贈られた「虻の磨句集」には

旅情 仄にウエストミンスター

といふのがあつて、私を首肯せしめたし、やはり最近贈られた「榴花洞日録」には

病人の淋しくつくる煙草の輪

ゴールデンバットの青さ春の風

の二句がある。これも同様参考資料となる句である。私の友達で死んだ珍茶坊には

お妾の あやめ吸ふとはしほらしや

がある。これは私の家で小集をやつたとき煙草の課題で作つたものだったが、珍茶坊も好きたつたと見えて、短冊へも書いてゐた。

こんな思ひ出に耽つてゐてはきりがなからいゝ加減に切上げて、諸君の句を見ることにしよう。

煙草の火夜釣の舟は歸るらし

下五の平假名がこちよ／＼と書いてあるので歸らないと

も讀めるが、斯う讀んでおくことにする。眞暗な水面と煙草の火の赤きに美を感じた句主の氣持は一應詠へてゐるが下五が獨斷的で第三者をうなづかせることは難かしい。

煙草の火夜釣の舟は向を變へ

ぐらゐに止めて置いた方が、余情が残りはしまいか。(句主大阪市よしを君)

物思ひまた吹殻が一つ増え

巻煙草の無かつた頃なら吹殻が一般的の用語だが、刻煙草より巻煙草時代の今日では、普通に吸殻としたい。それによつて句の品位が損はれもせず、句意も違はないとすれば、猶のことであらう。その點さへ首肯して貰へば、完成した句だと云ひ切れる。(句主 大阪市 龍城君)

煙草のみ歸つた後に空箱が

これで愛煙家の彼が歸つた後に空箱が残されてあつたといふことは判るが、判つただけでは川柳化されたとは云へない。それに喫煙家を煙草のみといふのも洗練されてない。

煙草好き煙草が切れて暇乞

といふやうに、彼が煙草が切れて話に興が乗らないといふこへも視線を轉じた方がよさ相に思へる。(句主大阪府錦溪君)

お見舞に來て病室で煙草吸ひ

病室と煙草へ着想したのはよかつたが、あまりにこの見舞客と同様に不用意なのはいけない。たとへば句主がこの不作法な見舞客への抗議だとしても、斯う眞正面から囁ん

で吐き出して仕舞はないで、

見舞客断つてから吸ひつける

とか、或は、

病人の好意煙草を喫へといふ

といふ觀方にした方が、同情的であらう。(句主 大阪市 春

葉君)

上長は煙草も喫まらずむつかしく

この上五には社會性がない。やつぱり目上とか上役とか

先輩とか云ふ方が無難でもあるし、社會性もある。そこで

煙草嗜まぬ目上に氣が疲れ

とむつかしく感じる自らの心持の方へ焦點を合せてみる方

がよい。(句主 兵庫縣普天君)

煙草止めたと云つた様だがすつてゐる

禁煙諸君に云はせると煙草は非常に有害であるが、喫煙

家に云はせれば煙草の効能がいろ／＼ある。然し量を過ご

せば私達にも煙草の有害さが判ることは事實である。そこ

でこの句主の詠まうとしたことがらが演じられるのだが、

私達の川柳が私達の感じたまゝをそのまゝ文字に移したか

らと言つて、それが川柳されたとはいへない。この句主に

は思想なり感情なりを濾過すべき川柳心を養ふためにもつ

と他人の作品を澤山お讀みなさいとすゝめるだけにどうめ

て置かう。(句主 ハルヒン きん君)

煙草の火借る氣で四邊見廻して

これだけならまだ川柳化す一步手前である。それから先
へ出なければいけない。

煙草の火借りる頭をべこり下げ

でも既に一步前進してゐるし、もつとこれを深めれば

金口へ火を貸すバツト見つめられ

まで行くことも出来るといふことは、作句に當つて骨惜し

みをしないやうにといふ意味なのである。(句主 今治市

向上庵君)

一發では落ちぬ射的の煙草買ふ

これを只單に聲調を整へるだけなら

一發で落ちぬ射的の煙草買ふ

と贅字を省くだけでもいいのだが、それでは私の氣に濟ま

ぬ點があるので、いろ／＼ひねくつて見たが、何うしても

句主の意圖からは遠いものとなつて仕舞ふので諦めること

にした。(句主 今治市 河鹿君)

盛裝が出来てお美しい長煙管

粧ひ着飾つた彼女が長煙管を持つてゐるのか、長煙管の

主がお美しいと見惚れてゐるのかはつきりしない。それは

中七の自他混亂が招いだ損失である。前者なら

盛裝て吸ふ長煙管及び腰

と著更へた彼女の着崩れを怖れる姿態へピントを合せるの

もよいし、後者なら

盛裝の娘を眼で撫でてる長煙管

といふように、句主が第三者の立場に立つこともよい。そのどちらにしたところで、盛装が出来はよい句語ではない。(句主 大阪市 眞津枝君)

葉巻吸ふ姿ひつくり返りさう

階級闘争意識の表はれとしても、あまりに安價な反感と云はなければならぬ。ブルジョアをやつゝけるなら

葉巻喫つてゐる無作法な鼻の穴

と彼氏を揶揄する位な心の餘裕は持ちたいものである(句主 大阪市 煙雪君)

喫煙家煙草の値には無頓着

喫煙家必ずしも煙草の値に無頓着ではあり得ないが、嗜好品には或は身分不相應な金を費し兼ねないのが人情である。としたら斯ういふ觀方をする句主は煙草を嗜まないものであらうか。若し又煙草値上への句主の關心ならもつと別な觀方があらうとも思はれる。そこで句主に求めるところは前者ならもつと喫煙家の心になつて見ることであり、後者なら視角を變へることである。(句主 高松市 柳夢君)

私の十五六年前の句に「暗闇にぼつかりと浮く煙草の火」といふのがあるが、よしを君のは、そこへ釣舟を配したのが手柄とも云へるが、それだけに句が重つ苦しくなつてゐる。

最近柳友のK君が煙草を禁めたいといふので財教社代理

部で賣つてゐる禁煙水を買ひに来て、効果を確めた上で一圓のを買つて行つたが、其後やめられないので困つてゐると聞いた。薬や代用品で禁めることは却々出来ないと思へる。結局意志の力より他に方法はないのかも知れない。

煙草戀しく曠方の原稿紙

詰罐

長崎カステラ



美麗な罐に盛る
新鮮な風味と
豊富な榮養と
一番氣の利いた御進物です

(八國百貨店、食料品店) アリ

本 長 崎 堂

大阪・天神橋南詰 電話二五三四番



春 宵 閑 語

大 連

小 林 茗 八

もつと要るなら手を叩きなさいね

腕のいゝ左官職を求む

廣告主は美容院顔面塗裝部

助けて呉れピー〜〜

玉子屋の玉子が隣の火事で躰つたんだ

惚れたの腫たのつて

虫歯で下ぶくれの美人になつたの

兩足ともミシンは踏める女です

手はオルガンだつたけど

カンガールかカンガルーかつて?

一體雌かい雄かい?

あなた、ナンディングイ

子供が欲しかつたら助産婦を頼むとい

俺んとも助産婦の子だ

餅屋は餅屋だ

流石に餅屋だ餅ばつかりだもの

河豚が當つたら、ひどい事になる

あのルンペンが今では一流の鰻料理屋の主人公だ

アンコールつて冷たい餡粉のことよ、

おいしいでせう

駄目よ唄にしたら、御相談がある
んですもの

世の中は二に二を加へても四にはなら
ぬ

其中から手数料を引くです

特に女はダイビングのいゝ型を習ふん
です

身投げの時、裾がまくれるのは見
つともないから

夫婦喧嘩の好きな夫婦が漫才になつた
身が入り過ぎて警官席の巡查が引
分けて幕

引退した力士が就職した
経験ある炭團製造所に

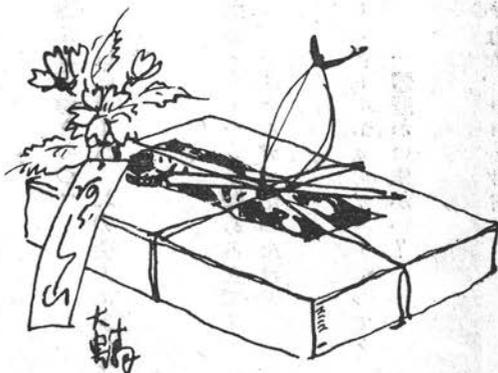
本日名所 名物川柳

(巻の都京)

山川紫明
朝賀大鱗
選畫

(九) 嵐 山

嵐山	ヒヤツ	と	さ	せ	て	竿	を	入	れ
ロ	ケ	ー	シ	ョ	ン	見	て	嵐	山
た	そ	が	れ	る					
渡	月	橋	渡	る	足	並	醉	ふ	て
お	り								
重	箱	へ	花	が	散	ら	つ	く	嵐
山									
提	燈	を	貰	つ	て	歸	る	嵐	山
佐	保	蘭							
葉	光								
狸	公	三							
憲	一								
木									
覆									



間借りするならお寺に限る

線香代が要らんからです

猫いらすを猫に喰はしてやれ

もう家では猫いらすだらうから

刑事のあとから走つてるのが泥棒だ

刑事は一回遅れてるんで

坊やのより小さい茶碗を買つてお出で

明日から居候が来るんだから

ニク賣ル、トリモツ有ル

女が居る譯ではない、支那人の肉

屋です

泥棒を捕へてから繩を絞ふ話

刑務所では泥棒に繩絞ひ作業をや
らして居ます

アベツクの群新緑の嵐山	極道の船が流れる嵐山	嵐山鹿も放せば育ちそう	嵐山何々プロを見付ける日	嵐山逆に寫してボートゐる	日歸りの時間が餘る嵐山	商用の旅を遅らす嵐山	嵐山日暮に寒い牛が鳴き	嵐山ゆふべの妓舟にゐる	子を連れて花には早い嵐山	貸ボート千鳥ヶ淵で引返し	嵐山どこのスターか洗ひ髪	花に來て紅葉をほめる嵐山	満開に成り虚空藏の忙しさ	前借をして嵐山で酔ひつづれ	嵐山靴と草履へ晴れ渡り	渡月橋生甲斐のある山の色	繪日傘に挨拶される嵐山	繪葉書の通り渡月橋春になり
いの助	宵明	竹阿彌	勝人	峰月	いわん	有耕	新水	水客	同	翠峯	同	世間音	同	同	柳次	同	同	水客



開公大日一月四



阿部九洲男・杉山昌三九主演

全發聲 忠臣藏

全日本に獅子吼する大都映畫社三年越しの大作

監督 白井戰太郎 解説 加藤柳美
 キヤメラ 永貞二郎 音 大都管絃樂團
 企劃構成 河合龍齋
 出場人員 一萬五千人 音樂指揮 遠藤浩史
 製作費用 十三萬五千圓 錄音 大都システム
 特別出場 美妓百數十名エ 琴 木下 糸路
 キストラ二千名 佐久間 妙子
 ロケーション 彦根 三城 輝子
 美術考證 飯野義明 大河百々代
 大都集鴨新舊合同總員！

大都映畫株式會社關西支社



花咲翁

さんのこと

石曾根民郎

ホリドリルからコロナにうつした甥の山崎一郎が「花咲翁さん」を吹込んだ。こゝ信州はまだ土が冷たいけれど、この童謡を聞いていち早く春の近づくのをおぼえた。

東京聯合花まつり會制定であるから、花まつりを見越しての吹込みらしい。十指にあまる彼のレコードをさきに興に乗つては聴いたりする。甥の聲がそのまゝも運ばれたえにしを賞でゝゐるのである。

小學校の一年生か二年生のとき、讀本に「コゝホレ、ワン／＼」と花咲翁のおはなしが載つてゐた。一人の子の父となつた私は「カレキニハナチサカセテミセヨ」を語つてやる身柄となつた。靜かな春近い夜の

窓でじつと考へると、人生といふ流れをひとと感じて涙ぐましくなる。健在である父や母へも、何か知ら人生の流れを思ひ及ぼしたりするのであるが。

花咲翁、桃太郎、カチ／＼山、舌切雀、猿蟹合戦の昔噺に幼き頃の想ひ出をくつきりさふが、れてゐる私達。何でもないこと、思つてゐたのに、子の親となつてかうした昔噺をまた子に傳へてゆく、その世のうつりかわりがなつかしいのである。

巖谷小波氏は桃太郎禮讀で、花咲翁と舌切雀が勸善懲惡の色彩に濃厚であるを難じ「正直な善い爺さんば、後に善い報を得るが、悪い方の爺さんや懲の深い婆さんは、

嚴しい罰をうける事になつて居る。それは元より好い誠に相違ない。然し私に云はせると、こうした勸善懲惡は、元々佛教や儒教から出た、姑息な教誡に過ぎないのだ」と「桃太郎主義教育新論」で述べておられる。カチ／＼山、猿蟹合戦も同じようにヤリ玉にあげ、どこまでも桃太郎主義に一貫して世相を批判しつゝ、桃太郎氣質こそ童心に植えつけるべきであると絶論せられてゐる。花咲翁の噺は勸善懲惡を利かしてゐるので好かないらしいが、私の所持してゐる四六判四巻ちりめん本（明治三十三年三月二十五日發行、著作者林弘之）の

The story of Hana sakashi jiji

の結末として

This is the good contrast of good and evil. Those who are wicked and evil get bad reward, and those who are good and honest get good reward.

さあるのは、きつと氣に入らぬだらうと思ふ。

そうかといつて、桃太郎より金太郎を讀讀する加茂正一氏もおられるが、私はごち



川柳塔

路郎選

昔娘にてありける頃の腕時計
 ほぼじろの聲を忘れた河の巾
 あぶな氣なお世辭ビヨビヨひよこの毛
 役目とて喘ぐ魚を見て廻る
 バタ臭い眼鏡の底に藝術か
 耳鳴りとせゝらぎの音と別れる
 預かつた鍵を氣にしてもう夜明け
 割箸に並んで呑むも久し振
 誤解されまいと口論つゞけてゐ
 箸つけてこれはどうかと前へ出し
 冬はこゝ夏はあそこと云ふ暮し
 弟に跡をつがせる散髪屋
 先代の通り保険屋断られ

大 阪 麻生 葭乃

同

同

同

金 澤 安川久流美

同

同

大 阪 橋本 緑雨

同

同

同

大 阪 高橋かほる

同

らかといふさ、桃太郎が好きだ。それと共に花咲爺も好いてゐる。爺さんが灰をまいたらバツと枯木に花が咲いたところを、くつきりと頭に舐がいて外のまごころを考へないでゐるたい。枯木に灰をまいたら花が咲いた世のなごやかさがこよなくうれしい。それを真似るほかの爺さんはなくもがなだが話の續き具合でどうでも出て来ないさつまらないけれど。

安永二年刊「千里の翅」にこんなのがあらる。

花咲爺、例の灰を持つて枯木に上り居るまごころへ御大名のお通り、下に／＼さいへば、「これは枯木に花咲かせ爺にて候」さいふ。御大名「これは一段マ面白からふ」さ秋から手拭を出して被らせられ「サア撒け」

花咲爺の癖をしつかり聞いてから、この小咄を讀んでほしいと作者はいつてゐるかも知れない。ごく軽い意味で私はユーモアを味はへる。これはほんたうのユーモアではあるまいかと思つてゐる。

田村西男氏が書いた明治末期の「藝者五

弱体内閣だなどと言ひ得て第三者
うどん屋も組閣の事に口を入れ
憤情をおさへ蜻蛉に止まられる
ぐにやぐにやと猫は線路を横切りぬ
つながれて馬うとくと四月の陽
お妾の豫定と五圓程違ひ
暗い優越感だ母にさからふ
簸に風しきり夕立雲走る
機械扉にはさまれかけた終電車
面會謝絶うぐひすが鳴く
收入をしらべる乞食陽があたり
貧しさを言ひつこなしにして眠る
しみぬきが高うかゝつたことも言ひ
廣小路課長の趣味を見付けたり
原價まで言ふて商賣骨が折れ
花名刺仕様ことなしに出して置き
健康をつゝむ職場のワンピース
すく／＼とはや三歳の子の寝顔
ぬすと猫大きなお腹で覗きに來
おろかにも惚れて自嘲の梯を嗅ぐ

大阪 中西おさむ

同

同

同

同

大阪 須崎 豆秋

同

同

名古屋 吉田 水車

同

同

同

同

大阪 姫田 夕鐘

同

石曾根民郎

花咲爺に似た灰まき爺。雁取り爺といふ話は、奥羽と北陸で語り草にされてゐる。飛ぶ雁の目に入れこれ捕ふるのである。そんな殺伐なしぐさは私は嫌ひだ。灰をまいたら枯木に爛漫と花咲く爺さんの頭巾を目に浮べてゐたい。チャン／＼を着て、あごひげが延びて、イザルを小脇に抱へた樹の上の爺さん、天晴れ／＼と日の丸の弱をかざしてゐる位も喜ばしい殿様さのコンビ。幼い頃に見たまゝの繪本でありたい。

その後の花咲爺といふのがある。その後の金色夜叉をわらつたものらしい。金が出来た花咲爺、ちと浮氣が過ぎる。お婆さんすこしヤキモチやきだからじつさとしておられず、ある晩いゝ機嫌に酔つた花咲爺に及物で切りつけた。痛いとお爺さんの鼻が落ちたがあわてゝ鼻をくつゝけたがさかさ。「これがほんたうの鼻逆爺だ」

明治に出た『滑稽類纂』の附録に「藪坂欲の守」がある。(尤もこの附録は一冊として別に出てゐて私も所持してゐたが紛失してしまつた)この殿様が三太夫から五大

にくしみが消える大人の日向ぼこ
 さびしさに克てぬ雪空屋根も寝た
 通帳さつと春風吸ふてみよ
 寝臺車妻子と春を別れけり
 人の子を叱り經濟的に生き
 働いた金に印鑑證明書
 地下鉄をほめてチンドン屋の眞晝
 これ位上手と自轉車手を放し
 内氣な子内氣な親を案じさせ
 無暴ぶり見せて圓タクへたばつた
 悪友を説き伏せて居る交叉點
 出勤の時間手紙の來る時間
 鳩ほつぽ飛び下りたとこ餌があり
 抱き癖のついた兒へ昨日も今日も雨
 銀狐男がたよりなく見ゆる
 弟に恩師の其後聞く夕餉
 信用をされて困つて居る内氣
 雑煮餅切る膝つきはかしこまり
 靴下のつぎも忘れて總踊
 屋上へ出た事務服の會釋振

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

大阪府

宮岡 白峯

大阪府

妹尾 變人

京都

明石 槐次

大阪

松下小柳子

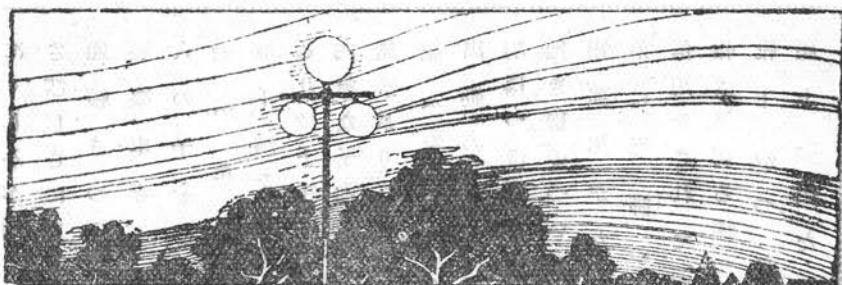
兵庫県

長崎 柳秀

同

嘶を聞いて感服しながらそれ／＼オチを
 けるのである。悪い爺さんがお大名の逆鱗
 にふれて肩先をきられる、留守居をして
 るこのお婆さんが、お褒美を買つて來ない
 が知らず待ちかゝれて外へ出てみるよ、血だ
 らけになつて歸つてくるお爺さんを老眼の
 悲しさから、結構な赤い衣服を頂戴して來
 た喜んだと三太夫が話すと、この欲の守
 が「その切られたのが夢ならば大層よいの
 ぢやがな」「サテさうして」「フム、金が身
 にはいると申す」
 大阪でも刀の夢を見るよ金運がよいこの
 俗信があるだらう。及物で殺された夢は金
 が入るさいふがあつて、金を拾つた夢は
 縁起が悪いらしい。信州ではかういひなら
 わしてゐる。
 花咲爺の嘶が及物三昧に落ちさがつてあ
 ぢきないが、金が入る夢のうらなひをよい
 ことにしてくれたらと念じてゐる。
 枯木に灰をまいたらパツと櫻花爛漫の春
 を夢みながら、まだ炬燵のぬくもりを愛し
 てゐる私である。

(二月二十六日)



車水田吉 姿の屋古名 川柳

熱田神宮

神域へさすがネオンもときかぬ

三種の神器の一寶劍の鎮り給ふ所、實に
 長き御神慮は二千年の今日斯く迄の發達
 を見る、尊く有難き極みである、今は大
 名古屋の中心に在はしますは畏れ多いげ
 かりであるが文化のシムボル、ネオンサ
 インもこゝばかりは御遠慮申上てゐる聖
 域の森嚴いやますばかり。

名古屋城

一と角の財産に見る金の鯨

大衆的人氣のあるのは何と云つても今も
 尙金の鯨針であらふ。徳川の葵の紋より
 も威光があつたかも知れないのは「尾張
 名古屋は城で持つ……」のなつかしい
 俚語でもわかる、時價八十萬圓と稱さ
 れる金鯨が南北に開府三百年餘もかはら
 めサンセンたる光を放つてゐるのは大名
 古屋發展の方向暗示の姿とも見える。

大須観音

觀世音島田に縁のある所

觀音様を中心に發展した街の形骸の例は
 強ちこゝばかりではない。東京の淺草は
 苔草よりも有名だし、各地それ／＼人
 佛を目標てに商賣乃至は觀光遊覽に榮え
 てゐる。そして必ず又こゝを廻つて花街
 の發展も妙な位従つて朝な夕なに扶香な
 らぬ脂粉がたなびき、島田や銀杏返へし
 が大方極つた黒襟の常着に情緒を撒いて
 行くのが型にはまつた點景となり又なく
 てはならぬ存在である、大須觀音様のお
 かげを受けて中京美妓三千の粹を誇つて
 ゐる。

覺王山

爆音に御佛の夢破れけり

昔お釋迦さんの遺骨が宙を飛んでこの地
 に來たさは御説であらふが、人間は科學
 の力を借りて神通力を得て、飛行機で宙

な飛んで過日遅繰へ行つて日遅親善の實
を擧げた其の飛行機が名古屋の三菱航空
機會社で出來た純國産鳳號であつたのは
蓋し佛縁淺からぬ次第である。

中村公園

中村の灯は太閤さんを忘れさせ

三傑の隨一、豊太閤生誕の地尾張の國中
村は愛如郡でなく、今は中區となり中村
を冠して榮える遊廓はナサケなくも中村
公園へ行く人の足をさめさせるべく關
所のやうにごつかご据つてゐる、上記の
句は私の體驗として罷こよう。

廣小路

家臺店にもネオンの花が咲き

敷えて銀座を引き出すにも及ばないけれ
ど名古屋の銀座、近代人のあらゆる味に
マツチする商店街アスファルトの感觸も
間違ひなくメインストリートの誘惑を持

つてゐる。すし、と言ふ字もネオンサイ
ンで、この夜の寵兒連日の夜店は延長
約一キロ、家臺店で食道樂を相手のおつ
さんが、せつせとすしならぬ數萬の富を
にぎり出したのや、堂々たる大食堂の經
營者となつた立志傳中の主人公等を輩出
した廣小路の夜市はたしかに名古屋色を
表はす代表の一つである。

新名古屋驛

驛を見に入場券の客となり

陸の軍艦、中京の大支關新名古屋驛は名
實共に誇るに足り、間口一六五米、奥行
五三米、費用二千五百萬圓、一日約六萬
人の乗降客を相手に二月一から開業し、
これを正面に眞つ直ぐ延びる二十間道路
櫻通りはやがてメトロの喰り込約束され
てゐる。

▼筆者曰く。四月十八日には名古屋で
全國川柳入交驛大會が開催されますから
御來駕を祈ります。

春のお姿

を：ゼヒく

藝術的で

大衆向な

工藤清寫眞館へ

朝日ビル一丁南・肥後橋
電土 5 5 5 0 番

藤生路郎著・染舟漫畫

果卵の遊び

定價壹圓・特價八拾錢 送料六錢
四六版一六〇頁・函入・漫畫三十二葉
川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふ
つもりで讀んで碎いて擗り餌にしたの
が「果卵の遊び」であるとは著者の字
文の一節である。

發行所

不

朽

洞

振貯大阪三〇三九九二

川協の頁

川・協の仕事はエスカレーターのように、挽みなく前進を續けて居るので御安心の上、氣長に御支援願ひたい。大分基礎工事がすんで来たのも柳界の將來を深思されてゐる諸君の御後援の賜だご感激してゐる。川柳人協會

★川柳始祖句碑除幕式

川柳きやり吟社發願、京濱吟社聯盟後援の川柳始祖句碑再建除幕式が三月二十一日龍寶寺に於て盛大に舉行された。

★日本柳壇百人撰

の移管

従來、川柳雜誌社の年中行事として遂行し來つた「日本柳壇百人撰」の事業は今後川柳人協會へ移管し、一層權威あるものとするこ

とにした。大方川柳人の御諒承を乞ふ。

★川・協會員倍加運動

川柳人はもつと、リンクバイリンクの力を知らねばならぬ。今の世の中は塊の力だ。繋がりの力だ。同じ方向へ走る力だ。一人の英雄が欠伸をする時代だ。川柳をよくするために思ひをこゝへ至さねばならない。川柳人協會はそのために生れたアツソシエーションだ。この意味から、川・協會員諸君の責任は重且つ大である。若しそれ此の際、一人が一人を協會員たらしめることが出来れば協會の擴大は年餘を待たずとも達成し得るだらう。

四月末日までに會員五名以上の推

薦者には粗景を呈上、十名以上推薦者には川協の評議員に推舉し、同じく粗景を贈呈して敬意を表することとした。特に御配慮を乞ふ。

★各地の吟社へお願い

川・雜の例會では川・協會員章の提示によつて會費の割引を行つてゐるが、全國各地の各句會でも川・協會員には特に會費の割引を願ひする。割引實行を應諾された吟社は御一報を乞ふ。本欄に紹介して會員の出席を促す事とする。

★寫眞を募る

遠隔の地にあつて、親しみを早めるために會員の寫眞を掲げたいので近影の惠送を乞ふ。



米 俵

書・齋・よ・り

麻 生 路 郎

ない。家族と一緒に感謝して胃袋に送りつけるつもりである。

會て日疋重亮君が東北地方の興行で御難に遭ひ、安宿の一室にみんなが、押し込められてゐた時、的もななく、公園へ出掛けたところ、一人の文學青年に會ひ、弟子入りを頼まれた。

その時「實は御難で、みんなが喰べるものも無くて弱つてゐるのだ」と話したところ、その青年が米を一俵車に積んで宿へ持ち込んで呉れたので一同は喊聲を擧げたといふ話。(明治時代のこと)それをフト思ひ出した。

私が米俵を貰ふのはこれがはじめで、はない。六七年前、まだ宇喜多翁(金吾中納言秀家の末裔)が生きてゐられた時分のこと、三越で農産物の展覧會があつた。農業に關して造詣の深い翁は展覧會で故郷の米を

買はれたが、さて誰に進呈したものかと考へられた。宇喜多翁も米俵ばかりは失禮だと思つてゐられたらしい。まあ世間ではそう思つてゐる人が多いらしい。

私が千本通りにゐた頃、玄關に米俵を幾俵だつたか忘れたが積み上げてゐるのに驚いた川柳家があつたがこの一文を讀んだ人はうなづいてくれるだらう。尤もあの時分には河内から俵で買つてたのもあるにはあつたが。

こんな譯で私は決して失禮だどころか、有難く思つてゐるのである。と云つても、もつと下さいと云つてゐる意味ではない。假りに世間で、失禮だといふ意味にとる場合の句がフト浮んだので不朽詞稿の中に入れた。句は本號の巻頭にもあるが、もう一度次に披露しやう。

同情の最後の品に米俵

米俵を頂いた爲めにこんな句が出来たと云つては、こちらこそ失禮だが頂かなかつたら、夢にも考へてゐなかつた想であるから、これ又米俵の送り主に感謝して、譯である。

某氏から、米俵を一俵貰つた。呉れるのに頗る低聲で、如何にも氣兼ねをした云ひ方で、「或る人から頂いたので差上げたいと思ひます。私の方は田舎から送つて来るので餘分になるので……」と云ふことであつた。

私は有難くいたゞいた。米俵をいよいよたゞいたからと云つて別にをかしい事でも恥づべき事でもないと思ふ。昔の侍はみんな殿様から米俵を貰つたものだ。それを藏前の札差に賣つてたつきのしろにしたものだ。藏前の古句は澤山あるから、川柳家は先刻御承知だらう。私は別に賣りはし

漫 畫 セ ク シ ョ ン

櫻 狩 異 變

漫 畫 ト リ オ

小 川 幹 夫
北 口 比 呂 武



↑ (一) 花より商賣
醉客「大將、ボンヤリしてれえで一杯
ごうだれ」
男「……ジツハ、アキビンラマツテ井
ルンテスガ……」(たけい)

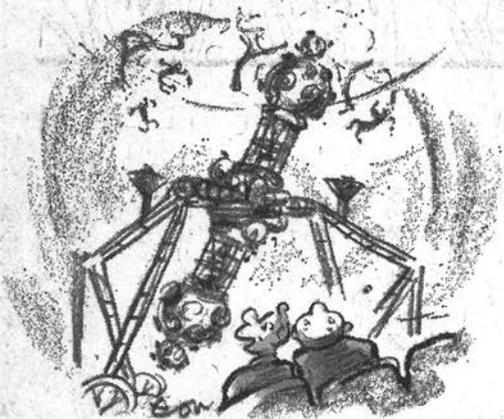
↑ (二) 成程々々
團長「今日の假装は女ばかりぢやなア」
團員「海軍、無條約時代でしてユヘヘ
……」(みきを)



→ (三) 社長は憂鬱ぢや
造花會社、社長
「本物より美しい我社の櫻を忘れたかッ!」

(四) プラネタリウム花見

プラネタリウム
天象儀のレンズを下界へ——まづ吉
野山で五万年先の花見が覗きたいです
ナ(ヒロム)



(六) 三七型假裝

三十七年は断然小型自動車に假
装してポータブルでもかけなが
らチャンチャカチャン／＼が：

(ヒロム)



(五) スタンド気分

スタンドバーのマダム、ミ
うもかうしないさ気分がで
んデス(たけし)



美流久川安 (へ人夫のしよ) てに宅自

禁酒して一ヶ年

ご五ヶ月餘

禁煙して漸く一

週間

煎じつめれば日

月に變りなし。そ

の代り子等にひさ

しく館のものや果

物をたべる。

十歳の茂坊さ六

歳の平坊さ四十六

歳の美の坊が煎餅

の公平分配にジャ

ン拳するさいふ圖

也。

ある時は子さ戯

れ、虱にも愛をも

とめた坊さんの氣

持ちもだん／＼に

判つて来る。

柳人はいつまでも「川柳」といふ既成

の文字に苦勞する如く、人間も飯の爲め

には相當苦勞する。但しおかしくて堪ら

ないことがある。

酒と煙草に遠ざかつたが、飯はますま

すうまい。からだに異状はないが、軽い

動脈硬化の方です。時々ハリさ灸をする

ごこまで現代文化に遠ざからうさいふ

曲者なり。

三月六日

天氣よけれど風強し。土曜の散策によ

し。勤め先から茅屋へ歸るに犀川を渡る

パスの中から眺望いさよろし。

柳の川べりに曾ては「川柳學會」を起

せし十數年前を愧ぶ。

亡き第一の妻すんとはじめて

結婚の時

神ぞ知るゑにしのか賜りて

人のひさりにとこしへの戀

ある戀人に

君さあふ淡きのぞみの日もすぎて

藤の花散る初夏に入る

亡き兄

白砂に矢の根石など探しあてし

亡き兄おもふふるさとの濱

舞鶴にて

近山に啼く鯛の夕ざれば

羽前の國の旅をしぞ思ふ

古い歌反古です。こんなものを聲の限

り朗詠してみろ朝の久流美は未だ若い。

但し川柳作るのが一番むづかしい。「枯

淡」に入つたのが「虚無思想」になつた

のか、色彩をさけて無地を好むさころ老

ひたさも氣づく。

春は獨活ささよりの酔味噲に限る。こ
れは下戸でも「春」の感じを充分にめぐ
んでくれるから。

錢湯に行き、めいさうに耽ること、わ
けもなくよし。今月のふあうすさ紋太氏
の作

めいさうの場所にゑらんだ風呂の隅
その實感こそ共鳴する。

金澤は大阪に比して田舎なれば特に
「錢湯」の氣分よろしがるべし??

街に住めば 高橋かほる

此度南地の藝者が廓を離れるん、信貴
山にお籠りしたのが藝者らしくて嬉しい
あれが生駒では女給染みてゑづくるしい



行路集

(4)

長野晴濱

あひびき

逢曳のごとせはしくもみそかにも歌をかきをり仕事の合間に
今朝の歌追へども追へども憶ひいでず會社をまかる夜は雨にして

えん會

歌枕見てまゐるべく忍耐の修業も積むべし宴會に行く
こゝに斯う逢ふも不思議のえんかいなどと言ひても解かずこの妓は
既にして酔ひ且つ歡ぶ人なかに離れ小島のごとく我れあり
やうやうに人をのがれて歸りつと机に向ふ撫でてもやりたさ



柳界展望

全園川柳界のこゝこ、各地川柳家の一舉手一投足をこの展望欄ですくわける様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

催

▲本社三月例会は六日夜誓待寺に於て開催、商用で來阪中の大野琴莊君、(東京)神戸の紋太君、京都の柳次君等、珍らしい顔ぶれ、路郎師の「道草」は春宵にふさわしい講演で、雨天にもかかわらず熱心な作家の集ひは樂しかつた。十時散會。

▲三月十日夕、祝野發行所主催で、故松枝規堂追悼句會が喜久の家食堂の樓上で開催された。

▲柳誌「松離子」を發刊されてゐる川柳季骨吟社(福岡)では十五周年記念川柳大會を來る五月十六日正一時から、福岡日々新

聞社三階大講堂で開催兼題「發展」「自信」「新刀」「請求書」「五月の女」午後六時から懇親宴を催すこの事、(會場未定)奮つて御参加をお願ひする。

▲故高橋しげ子女忌明句會は三月十四日午後一時から大連の自宅に於て開催、來會者には同女史の句集「白椿」を贈られた。

▲三月二十七日午後七時から川柳柳社が生れて二周年、川維兵庫支部として創立一周年を迎へた。その記念句會を神戸和田宮通衛生事務所に於て開催。

▲川柳始祖句碑再建の除幕式は三月二十一日正一時から川柳きやり吟社の發願、京濱川柳聯盟

の後援によつて淺草の龍寶寺に於て開催、盛會だつた由。

▲川・雜御池橋支部では日本樂器大阪支店へ入店の闊秀作家畑田よし江女を迎へその歓迎會を三月十九日夜同店階上で開催、來會者は、よし江女、かほる、夢裡、宵兒、いわを、機見女等

創刊と癡刊

▲「三味線草」誌が本田溪花坊君を主盟として活字化され、その發展を囑目されてゐたが、二月末突如として大大阪川柳社を解體し、「三味線草」の名は森雞牛子君に返還、その二月號は再び謄寫版刷として刊行され、溪花坊君の大大阪川柳社及北大阪川柳社は社名を解消し、二者合して「川柳國」をその發行所から刊行することとなり、三月十一日創立句會を開催した。發行所は大阪市北區萬歲町四九大阪細菌研究所内

▲大瀬戸耕作、千木水仙君(石川)等によつて謄寫版刷りの「川柳さしなみ」の第一卷第一號が

柳誌要目 (二月號)

- 日本史傳川柳狂句(七)遺稿 岡田三面子 (三味線草)
- 眉斧目錄論評 諸 家 (三味線草)
- 川柳語雜考(二) 原 退藏 (三味線草)
- 古句研究の過去を顧る 花岡 百樹 (番 傘)
- 「釜がつるむ」に就いて(二) 竹重 虛心 (むさしの)
- 形態主義攷 鈴木小寒郎 (川柳ベル)
- 川柳作家の教養問題(二) 川上 日車 (水 原)
- 田中君の新生命主義に賛す 木村半文錢 (水 原)
- 柳密漫筆 和田天民子(川柳俱樂部)
- 俳壇はわれらの假想敵たる資格を喪失せり(時評) 品川 陣居(川柳きやり)
- 自分のこゝばを持つて

發刊された御發展を祈る。
▲佐々木紅翠君の編輯で柳誌「紀元」が創刊された發行所は横濱市中區大岡町六一九横濱川柳社

消 息

▲本社客員川村花菱君（東京）來阪、三月五日夜路郎師、東魚君打連れて大野屋別館に默談、同夜九時半歸東された。

▲橋本綠雨君（大阪）は二月八日以來病床についていられたが三月四日から勤務につかれた。

▲桂閑々坊君（朝鮮）は二月下旬から三月上旬にかけて南鮮地方を次ぎ／＼と旅行された由。

▲大野琴莊君（東京）は三月五日來阪、多忙の中から本社例會に出席され、七日夜行で歸東された。

▲三原狂路君（山口）は昨今健康を害してゐられる由、一日も早やく御快復を祈つてゐる。

▲池田可宵君（川・協名譽會員）は二月廿四日仁川高等女學校に於て「生活即川柳」と題して一

時間半にわたつて講演された由
▲西いわを君（大阪）の赤ちやんは啓子と命名された。
▲狩野茂都子女（鏡川）來阪三月十六日夕路郎師、機見女と共に歌舞夜座樓上で默談。

▲柳誌「京」のために十五年間力圖された山川紫明君（京都）は京都川柳社を退かれた。

▲藤生路郎師は三月十四日の大阪毎日サンデーペーパー紙上の「議會のそま明朗質問戦」に於て「時計の針は何故左へ廻らぬか」「尼さんは何故丸坊主か」の賢答をされた。

▲亦四月上旬から一ヶ月間讀賣新聞（東京）紙上に自作の川柳を發表され、これを前川千帆氏が漫畫化されることとなつた。

▲大連の大島瀧明君（川・協名譽會員）の長女昌子女は二月十一日の佳日を卜して結婚された遙かにお喜び申上げる。

▲關本雅幽君（大阪）の母堂は六十四歳を以つて二月下旬逝去

された。謹しんでお悔み申上げらる。謹しんでお悔み申上げる。
▲黒田一角君（徳島）の川柳に理解のあつた母堂は腦溢血で靜養中二月十七日長逝された由、謹しんで哀悼の意を表する。

▲高橋月南夫人（大連）しげ子女史は女流作家として、又柳誌「青泥」のために活躍されてゐたが二月七日午後十時四十一歳を一期に永眠された。遙かにお悔み申上げる。

▲櫻井六葉君（金澤）の嚴父は二月二十八日長逝された。

▲尼縁之助君（鏡川）の岳父は二月下旬他界された由お悔み申上げる。

▲野村花喜津君は春潮

▲矢野蛇の腹君（松山市南柳井町五五）▲加波澤黙六君（東京市荏原區上神明町四七）▲小林燈雪君（大阪市住吉區帝塚山西二ノ一五）▲みすか川柳社（今治市寶來町西原一穂方）

▲野村花喜津君は春潮

▲矢野蛇の腹君（松山市南柳井町五五）▲加波澤黙六君（東京市荏原區上神明町四七）▲小林燈雪君（大阪市住吉區帝塚山西二ノ一五）▲みすか川柳社（今治市寶來町西原一穂方）

▲野村花喜津君は春潮

▲矢野蛇の腹君（松山市南柳井町五五）▲加波澤黙六君（東京市荏原區上神明町四七）▲小林燈雪君（大阪市住吉區帝塚山西二ノ一五）▲みすか川柳社（今治市寶來町西原一穂方）

川 柳 指 導 講 座

（古今川柳評論の十四）
堀口 塊人（昭和川柳）
川柳への發展（七）
― 上代文學への一考察 ―
石崎 柳石（川柳みすか）

本社の指導講座は平易懇切、全く手を取らんばかりにしての講座振りです。川柳を作りたい、どうしたらいいか迷つてゐる間に、五七五中心に、課題によつて作り、本講座へ送られるが捷徑です。講師はこの道の苦勞人、塚越正光先生です。講師「猫」一人一句課題「塚越正光先生」
講題「猫」一人一句
縮切 四月廿日
本社宛「川柳指導講座句稿」と明記する事

商品價川柳の一考察

伊藤 瑤天（芥子粒）
騰駕刷繪本柳樽を手にして
蛭子 省二（松嘶子）



横 縦 輯 編

▼こさしは冬がなかつたさ云つてもいゝほど寒さがこたへなかつた。風邪藥を賣つてゐる紳樂君や吹事手袋を賣つてゐる番茶君には氣の毒だが、そればかり賣つてゐる譯でもなからうから辛抱していただくより仕方ない。藥平君がかしわの水だきをしてゐる義兄へ年賀に出かけて、こさしは暖かだ、エ正月やなと云つたら、暖かくてはかしわが賣れへんがなとたま／＼おべんちやらを云つたさも／＼反つて出られましてなと云ふ話を思ひ出した。三方四方エエ事と云ふものはないものだ。僕も三月の中旬から疲れて寝込んだ。十七日の尼ヶ崎の會も幹事路風君の折角の骨折を無駄にしてしまつた廿六日の阪大の會へは辛じて出

席したが、歸るさすぐに又寝込んでしまつた。そして、痛む頭を抱え咳の連続の中で筆を執つた。もう幾日か宅へ歸へらずに書齋に籠城してゐる。

▼昨年来の努力のあらはれがボツ／＼見へて来た。本屋の賣れ高なども倍加されて来た。一日發行に變更した響影もハッキリ見へて力強く感じている。一般の購讀申込が殖えて来たし柳友諸君の後援も有難い。この上さよよろしく御願したい。

▼ケン／＼暖かくなるし、部屋の中の句會ばかりもどうかといふので里十九君等の肝煎りで別項掲載の如きプランで玉手山から汐の宮方面へ四月二十五日に吟行を試みる。こさになつた。野道歩きながら、我等は若い人諸ふのことも悪くはないと思ふ。せい／＼お出掛け下さい。

▼前號の九頁下段十一行目の句で内務省からお叱りを受けた。大衆を諷るさいふ御意見である

▼前號の扉の句「街に住めば」が好評だつたので、もう一回街に住めばの句で埋める積りでゐ

たが、適切な句が少なかつたので中止した。句を寄せられた方は悪からずお宥しが願ひたい。本號の扉の寫眞はT病院で病を養ふ金田並木君が自ら撮影して送つてくれたもの、病室とは云へ、いかにも春らしい感じが出ているので、お目にかけることにした。

▼前號色ペーシの「春寒爐邊」(森東魚氏)は大好評だつたが、本號では遠く大連から稿を寄せられた才筆の雄小林若八氏の春宵閑語を掲載することが出来た

▼なほ不朽洞會員の石曾根民郎君(松本)が花咲翁さんの新らしい研究「花咲翁さんのこと」を寄せてくれた同じく吉田水車君(名古屋)が交際會への出席を促して、川柳名古屋の姿」を寄せてくれ期せずして不朽洞會員の活躍は有難い。

▼三月上旬に川村花菱君が來阪東魚君と三人でパンシガンでゆつくり談すつもりが大毎の「真人の真操」の座談會へ花菱君をさらつて行かれゆつくり談す機会を失つてしまつた。新聞記者

にはかなひませんよと云ひながら、花菱君は商賣を忘れない。「真人の真操」もいゝが男の友情をアチ毀けず記者諸君もト氣をつけて欲しい。お陰で、飲まず食はず、もう發つさいふ花菱君を大野家別館に訪ね、酒呑みへの意見みたいなものも聴かされて、九時十分の汽車へ送り込んで、漸く酒にありついたのが十時すぎ。

▼山雨樓君から原稿が来る筈だつたが來ない。どうしたんだらう、病氣かしらと案じてゐたら、原稿は書いて見たが發表は見合はせる、何れ四月早々に大阪へ行くさいふ頼りがあつた。四月三日にでも来てくれればいゝと楽しんでゐる。去年の秋から會はぬので待ち遠しい氣がする。

▼田田亂耽君が不朽洞を退くことになつた。家庭の事情で辭めさせて欲しいさいふ申出は昨年のお全ごころであつたが、社の事情も考慮して今日までフン張つて呉れてゐたので萬止むを得ないものさして認めた譯である(略)

川・雜・案・内

六號(字十四)第三行金五十錢、一行増すこと
に金一錢(但し前金切手代用可)
改題、移轉、任意案内、柳雜社、その他

川・雜・句・箋

「川柳雜誌」への投句は新らしく出来た樹形の美しい投句用箋をお用ひ下さい。

句の書き心地もよいし、選者が選句されるのにも、便利で句の見損じもなく相方に好都合であります。自分の句を尊重される意味からでも御使用をおすゝめいたします。送費は本社で負擔いたします

八十枚綴 一冊 金十五錢
同 二冊 金廿五錢
御申込は川柳雜誌社へ
切手代用も可

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、短冊を川柳家に限り左の通りで頒布致します

軸箱入 二拾圓・額 二拾圓
小物 五圓・短冊 參圓
御申込は前金で發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本第二巻より第十一巻まで

各一卷 金壹圓五十錢
第十二巻及第十三巻 金參圓
送料 大阪市内 一冊六錢
市外 一冊廿四錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

懸賞川柳

課題 「姿見」 四月十日

「單衣」 五月十日

用紙は官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事) 選者麻生路郎氏
秀逸數句に薄謝を呈す

宛先 大阪市西成區玉出本通
三ノ三六 麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

日日柳壇

大阪日日新聞の柳壇が復活しました
課題 「花見」 四月八日
選者 麻生路郎先生
甲紙は官製ハガキ

宛先 大阪市西成區玉出本通
三ノ三六 川柳雜誌社 麻生路郎先生(日々柳壇と記入のこま)

殘本分讓

川柳雜誌の殘本が少數宛ありますので、左の通りで分讓申上ます

第二巻より第三巻迄 十五錢
第四巻より第十二巻迄 一冊二十錢
第十三巻 一冊一錢

御申込は前金で川柳雜誌社へ

句會案内

本社句會案内御希望の方は左記へお知らせ下さい。

大阪市南區疊屋町六
永田里十九方

川柳雜誌社俱樂部
電話南七五五一番

川柳を作る人、愛好する人の必讀誌 毎月一日發行 一部廿錢・送料一錢

川柳俱樂部

東京市牛込區拂方町一四
川柳俱樂部社

川上三太郎大谷五花村共宰

川柳研究

一冊 金廿一錢(郵税共)
一年 金二圓四十錢(同)
東京市王子區七丁目八五〇
發行所 川柳研究社
振替東京九四〇四六番

川柳きやり

菊利每號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豊島區高田本町二ノ一四
六八
川柳きやり吟社

川柳松囃子

毎月一日發行一部廿錢(税共)
福岡市下店屋町九

川柳拳骨吟社

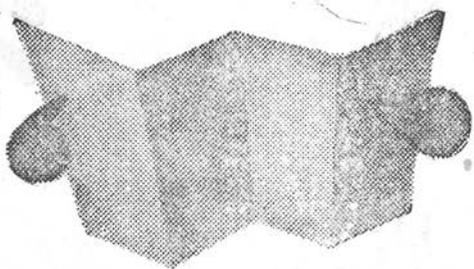
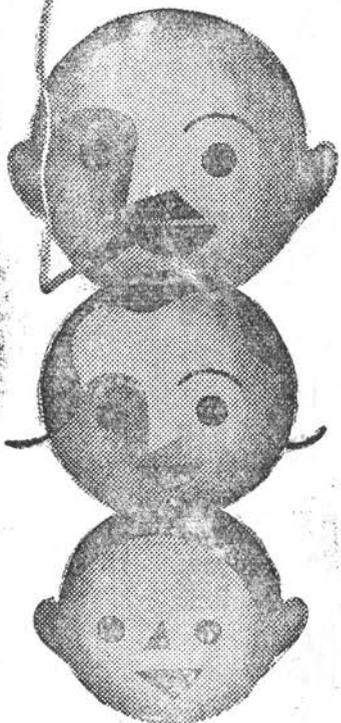
菊正宗

宮内省御用達

株式會社

本嘉納商店

たしかな保険・たのしい家庭！



日本生命

大
阪
・
今
橋

(營業案内贈呈)

酒

白鶴

清

ハクツル



元壺設

社會名合納嘉

天奉・連大・川仁・城京・戸神・京東・阪大

獎推 士博學醫林極
查監 士博學醫瀨片

錠ムーユシルカダブ

安産

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる妊娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシュームの使命であります。即ち母体と胎兒の保護營養に任じ、悪阻期を安全に経過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますから、お産の守護神として御信任を頂いてみます。更に授乳期には、母乳を豊富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の悪化を防止し、乳兒も随つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀨醫學博士述「安産のために」通皇

のため
に

代時ムーユシルカ
てし設建を



茲に二十年、幾十萬の妊娠婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讚せられつゝある事實と、我國カルシューム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀨博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は、弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシューム錠」

店商助卯印和 町修遠坂大

投稿規定

- ▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▲「近作柳樽」は全家の雜吟を募る。
- ▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。
- ▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
- ▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▲書體はなるべく階書「川柳雜誌原稿」ご封筒に朱記の事
- ▲締切は嚴守されたし。
- ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募 集

第十四卷第七號課題

五月一日締切

(十句以内)

退社 前田雀郎選
夫人 住田亂耽選

第十四卷第八號課題

六月一日締切

(十句以内)

海 大島濤明選
會計 橋本綠雨選

每號募集

近作柳樽(雜吟) 麻生路郎選
各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

定 價

一 部 金三十錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

廣 告 料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○歸代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりご御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年三月廿五日印刷
昭和十二年四月一日發行
第十四卷 第四號
(毎月一回一日發行)

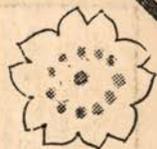
禁 無 斷 轉 載
編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
發行所 川柳雜誌社
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話 天下茶屋二五七九番
振替 穴阪七五〇五〇番

支社 東京市蒲田町女塚町二〇三
川柳雜誌社東京支社

賣 捌 書 店

(大阪) 大賣捌大寶書店 參文 明文堂 朝日ビル書店
其他 市内各書店(東京) かん東京堂 かん嚴松堂 かん吉岡書店
あさ玉森堂 紀伊國屋 三味堂(神戸) 米田實文館(函館)
石塚(京都) 三宅(名古屋) 靜觀堂

大正十二年三月三日第三種郵便物認可
昭和十二年四月一日發行



へ

海

南

は

春

絶新吉野櫻勝
新和歌浦
西國二番
彼岸櫻島
女ヶ島
島の遊園地
花のトンネル
たんのわ
温泉新設
楠公遺蹟巡
さく遺蹟
楠公遺蹟
炭酸鑛泉

お花見
宴
遊
券

(難波より往復割引料理付)

天見温泉	天野山・観心寺	長野・三日市町	淡輪	辨島	加太	紀三井寺	汐干狩	新和歌浦	新和歌浦
三〇〇	一六〇	一六〇	一〇〇	二八〇	二九〇	二三〇	二三〇	二三〇	二三〇

和歌山市より

い三圓八〇・ろ三圓三〇
は二圓八〇・に二圓三〇

南海電車

川柳雜誌 (第一五九號)

定價金參拾錢 送料壹錢